

えんぽとたんぽの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報 第 158 号	2014年9月23日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：原谷 一誠
---------------------------	-------------	--

1. 活動報告（事務局 記）

—9月6日（土）参加者は16名でした。

- ① 椎茸のホダ木を正式整列しました。正常な菌の発生が見られ、来年の春にはドンコ椎茸の採取が出来ると思います。
- ② 草刈は田んぼ周囲と須賀河内川側土手一部を行いました。
- ③ 参加者が予定以上でしたのでため池内のカナダ藻も駆除しました。

—9月12日（金）① 水車異常 数日前より水車から異音が発生し近所から連絡がありました。早急にグリスアップをしましたが異音は止まらず。さらにグリスアップを実施して本日水車本体の苔除去と洗浄をして異音は解消しました。

- ② 伐採したねむの木の花の処分が終わりました。吉富・原田会員
- ③ 池のカナダ藻の駆除追作業 本日 前田会員
- ④ 田んぼの稲の穂も充実してきましたので簡欠注水を始めました。

—9月20日（土）今日・明日の小学校の運動会のために、子供たちの多くが欠席し、参加したのは1家族のみで、会員は9名でした。松原会員の講師のもとで、ビオトープ内の昆虫を観察しました。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎見学者

- ① 一山口県自然観察指導員協議会定時総会
日時場所 11月9日9:00～12:00 二俣瀬ふれあいセンターにて、
午後 30名程度ビオトープの見学をされます。
案内は不要と連絡が入りました。
- ② 10月8日 市内の女性有志（代表花子さん） 数名の見学者あります。
昭和山遊ロードを含むため原田マが案内いたします。

◎行 事

- 10月5日（日）維持活動（草刈り・エコアップ）
- 10月18日（土）稲刈り（親子自然観察隊・二俣瀬子ども会）
- 10月末定 稲脱穀（天候と乾燥具合による）

3. 来訪者の声

今月はありません。

4. 会員の声ー1【 季節の野菜をいただいて】 （ 中本 亜矢子 記）

ビオトープの会員になってから、四季折々に二俣瀬の会員さんから季節の野菜をいただいている。春はタケノコ、夏はらっきょう、冬瓜、かぼちゃ、秋はさつまいも。二俣瀬の地で育った美味しい野菜たち。本当にありがたい。いただくたびに、いつも、新鮮なうちに美味しくいただこうと、自分なりに頑張って料理を作っている。



そして、このたびは、「栗」。二俣瀬の会員さんから栗をたくさんいただいた。そのまま茹でてでも美味しいけれど、せっかくなので、栗ご飯と栗の渋皮煮に挑戦することにした。

まず、栗を熱湯に10分程度漬けて置いてから、皮をむく。皮が硬い。昨日栗の皮むき器を広告で見たので、よっぽど買ってこようかと思ったが、お金を使わず工夫するのが大事と考え直し、ひたすら皮むきに没頭した。26個の栗の皮をむいて、栗ご飯用に下準備をする。残りは、渋皮煮用。ひたすら皮をむく。手を切らないように慎重に、慎重に…1時間も剥いていたら手も頭も疲れてきた。測ってはいないけど目分量で1キロ程度ありそうなので、調理にかかる。ネットで作り方を検索したら、重曹が必要だった。しかし、あいにく重曹が切れていたの、スーパーに買い出しに。ああ、時間がかかる…

さて、気を取り直して、栗を煮る。重曹を入れて3回煮る。煮ているうちに、渋皮に残っている黒い筋の部分を取りやすくなるので、爪楊枝で丁寧に取り除く。2度、3度と茹でこぼすうちに、渋皮がめくれて身が崩れる栗が出現してきた。3度目は、鍋から一粒ずつ栗を取り出し、水で洗った。きれいにつくるには、手間がかかるものなのだ。

最後に、水洗いした栗を、これまた一粒ずつ鍋に戻し、ワインと砂糖と水でじっくり栗を煮詰める。半日かけて、ようやく出来た渋皮煮。皮の破れた栗も結構あったけれど、我が家で食べる分には問題なし！夕食には栗ご飯も炊いて、秋の味覚を楽しんだ。手間がかかった分だけ、美味しさもひとしおである。



普段はなるべく手をかけないで済むもので食事を済ませている私。こんなに手間をかけて食事をつくることはめったにない。

頂いたものを無駄にしないで、お金をかけないで、美味しくいただく為に頑張れたことに満足し、幸せな気持ちになった。幸福感とは、こんなささやかな日常にあるのかもしれない。

4. 会員の声ー2【追申・稔るほどこうべを垂れる稲穂かな】 （ 原田 満洲夫 記）

今年もビオトープで親子自然観察隊・二俣瀬子ども会の稲作体験のもち米の穂が出て秋の刈り取りまで稔ってくる。

本来は、昔から「人間が心も人格も知能もすべて出来上がって聖人君子みたいな人のことを“実るほどこうべを垂れる稲穂かな”と表現し褒め称える。しかしその人が人生的にも経済的にも含めすべて裕福であるかというところでもない。

稲が十分稔れば、確かに穂を垂れる。ここまではすべて周りの人は褒め称える。しかしここからが大変である風が吹いたり、大雨が降ったりした一寸した抵抗にあった場合、稔った穂の重みに耐えきれず茎が折れたり穂が土中につかり最終的には収穫が少なくなる事が再々ある。何においても満杯になるのではなく適当！（90%～95%）に余裕を持たせることが肝心であろう。

追申“稔るほどこうべを垂らしたふりする稲穂かな”が正しい諺であろう。

5. 親子自然観察隊（秋の昆虫）（原谷 一誠 記）

参加者は少なく天気も曇り空であったが、皆でビオトープ内を駆け巡り昆虫を採取した。採取した昆虫は、トンボ 10種（マユタテアカネ、ネキトンボ、ナツアカネ、リスアカネ、ノシメトンボ、ウスバキトンボ、ショウジョウトンボ、ハグロトンボ、ムスジトンボ？、セスジトンボ？）、チョウ 4種（キタキチョウ、ヒメウラナミジャノメ、ヤマトシジミ、ムラサキシジミ）、バッタ他 6種（オンブバッタ、ショウリョウバッタ、ツチイナゴ、ハネナガイナゴ、エンマコオロギ、コアオハナムグリ）でした。赤とんぼ（5種18匹）では、マユタテアカネが9匹で一番多くいました。図鑑で確認して逃がしてやりました。



親子自然観察隊（9月20日 秋の昆虫）に参加した親子の感想

★下川拓実くん

網でトンボを取るのが楽しかった。僕は特に羽の付け根の黄色いトンボをたくさん捕まえたが、それは根黄トンボだと教えてもらった。他にもいろんなトンボを捕まえたが、見分け方がわからなかった。指導員の方に、秋アカネと夏アカネの違いを教えてもらった。よく似ているけど、胸の線で見分けるのだそうで、夏アカネは胸の線が途中で切れているが、秋アカネは切れていないと教えてもらった。他にもいろんなトンボを図鑑で調べながら名前を見つけた。捕まえたトンボを帽子にのせたら、ずっと帽子の上にとまっていた。



6. ビオトープ関連：「山口県のトンボたち」 （ 管 哲郎 記）

(21) コバネアオイトトンボ *Lestes japonicus* Selys

アオイトトンボ科 <アオイトトンボ属> *Lestes* Leach

本州の青森県より四国、九州までに棲息しますが、環境省の絶滅危惧種「絶滅危惧Ⅰ類」に指定され局地的に棲息しており、山口県でも「絶滅危惧ⅠB類」にランクされています。外国では朝鮮半島と中国の一部に棲息しているようです。

6月ごろより羽化を始め11月ごろまで見られますが、9月ごろより10月にかけて多く見られます。県内でも宇部市及び山口市、山陽小野田市、下関市、長門市の県西部地区の一部の池でしか見つかっておらず、東部地区よりは全く発見されていません。大変貴重なトンボです。植生豊かな古い溜池などを好むようですが、条件さえ整っておればそうでもなさそうで、15年ほど前に造成された大きなため池で、大量の本種の棲息を確認しています。

なんとか東部地区での発見を心がけているのですが、担当者も少なく手が回らず、情報不足かもしれません。

仲間のトンボにあと2種類、アオイトトンボ、オオアオイトトンボがおり、良く間違われます。この2種類は秋になると県内には比較的多く見られるようになります。



コバネアオイトトンボ♂

コバネアオイトトンボ♀

下図はそれぞれ3種の見分け方です、勉強してみてください。体色は緑色、金色など。



アオイトトンボ
(胸に白い粉をふき白くなる)

オオアオイトトンボ
(胸の2段目まで緑がかかる)

コバネアオイトトンボ
(胸の2、3段は白い)

7. 会よりの連絡事項

- ① 26年度半期の維持管理費含む活動支出が37,000強です。収穫祭が終われば設備の修復に支出が増えてきます。何とか材料購入費で使い、工事は会員の皆様をお願いすることになります。よろしくご協力をお願いします。

主に散策橋の修復・水路のU字溝の追加工事・水車修復・新看板交換等に必要となります。

- ② 「昭和山遊ロード二俣瀬」を散策されたグループの方で頂上付近で道が分からなくなって登り口に後戻りをしたと2回情報が入りました。頂上付近の案内板の張替と通路の草刈りが早急に必要です。清瀬峡も含め臨時の活動を計画します。

8. 編集後記

小学校の運動会と重なり親子自然観察隊の参加者は1家族ととても少なかった。日程を変更しようかという意見もあったが、それぞれの人が予定を立てており、そのままの日程で実施した。結果は、会としては少ない割にもまあまあの昆虫が採取でき、講師の松原さんもビオトープでの赤とんぼの様子が分かって良かったと言われた。また、道具も子供用で、柄も短く、高い枝に止まっているものや、ヤンマのように高い所を飛ぶものは採取できなかった。これも子供中心の観察では仕方ないことだと思います。ビオトープでの動植物の調査をするのであれば、それ用の道具も必要であろうが、はたしてどれほどの会員がやろうと言われるのだろうかとても疑問でもある。

(原谷 一誠 記)